発行　京都図書館情報学研究会

中国の大学図書館における学習支援に関する調査報告

川崎良孝・呑海沙織・李霞・劉暁丹・徐宏宇　著

中国の大学図書館における学習支援に関する調査報告

著　者
川崎良孝・呑海沙織・李霞・劉暁丹・徐宏宇

発行　京都図書館情報学研究会

はじめに

1

筆者自身がもともとアメリカ公立図書館の歴史と現状を研究してきたこともあるのだが、日本の図書館研究はもっぱら英米の図書館を主たる研究フィールドとしてきた。東アジア、とりわけ中国や韓国に関する図書館研究は視察報告であったり、断片的な業績であったりすることが多く、少数の例外を除いては、実際の図書館活動の全体像や歴史的展開を解明するという段階には達していない。

ところで日本図書館研究会では 2001 年に上海市図書館学会と学術協定を結び、3 年を周期で相互に国際シンポジウムを実施することになり、それは現在も確実に続いている。3 年の内、1 年を関西で、1 年を上海で、残る 1 年は検討期間として、これまで 8 回の国際セミナーを実施した。一方、上海図書館は 2 年に 1 回、上海国際図書館フォーラム（Shanghai International Library Forum）を開催している。これは数十か国から 200 名程度が参加する大きな大会である。それゆえ 6 年に 1 回は両大会が合一して、2004 年には上海で、また 2010 年には杭州で大きな国際大会が行われ、日本側からもいずれも 15 名程度が参加した。2013 年には上海で、2014 年には日本で日中図書館学セミナーが開催されることになっている。

例えば上海図書館が指導して、上海では図書館利用の共通利用カードを出している。これは端的にいうと、カードを持っていると上海市内の公共図書館を自由に使えるというものである。かつて上海図書館の幹部はこの措置を日本のセミナーで強調したのだが、日本では 1 つの自治体の住民がその自治体内の公共図書館を自由に使えることは当然のことで、それを画期的なサービスと強調する中国側の発表に違和感を感じたのを覚えている。しかし少し調べてみると以下のようなことがわかる。上海市、上海市の各区（および県）、各区の中の街道（郷鎮）は、おのおのが独立した行政単位であって、財政および職員などはおのおので独立している。すなわち自治体が入れ子状になっている。そして上海図書館は各区（県）の図書館にたいして、また区（県）の図書館は各街道（郷鎮）の図書館にたいして、何らの命令権限を有していない。そのように考えるとたしかに共通利用カードの発足と浸透は、非常に大きな事柄である。端的に述べれば、上海図書館の役割は指導と助言にとどまる。

そうしたこともあって、中国の図書館に関心を持つようになったのだが、さらにいま 1 つの要因もあった。筆者は 1995 年から大学の管理職になり、筆者が国際交流を柱の 1 つに設定し、そしてその対象国として中国を最重視したため、北京や上海などに行く機会が非常に増え、1 年に 4 回ほど中国に行き、特に教育状況と教育学関係の研究の状況、大学の状況、それに社会全般の課題や問題点など、中国の教育に関する拠点大学や拠点研究機関の幹部と意見を交換してきた。そうしたことが、中国の図書館状況への関心をいっそう高めたのはまちがいない。それまで、筆者はアメリカ公共図書館の歴史研究を第 1 の柱に、アメリカの図書館における知的自由の歴史的展開と現状を第 2 の柱に研究してきたのだが、中国の図書館に関する研究を第 3 の柱に加えることにした。もっとも、この第 3 の柱は研究といえるものではなく、今後の研究に役立つような基礎的なガイドという側面が強い。いずれ本格的な研究者が現れることを期待している。

2

そうした関心から筆者が発表した文献を、時系列にそって示しておくと次のようになる。

(1) 呉建中・塩見昇・川崎良孝著, 菅待子訳, 川崎良孝編『21 世紀の図書館を考える：中国・日本・アメリカ』京都大学図書館情報学研究会発行, 日本図書館協会発売, 2001 年 10 月, 252p.
(2) 王漢棟・王萍・魏家雨編著, 櫻井待子・徐瑛・川崎良孝訳『調査研究サービスの理論と実際：上海図書館・科学技術情報研究所の経験』（*KSP* シリーズ 5）京都大学図書館情報学研究会発行, 日本図書館協会発売, 2006 年 10 月, 152p.
(3) 呉建中著, 川崎良孝・櫻井待子・村上加代子訳『21 世紀の図書館：世界のなかの中国の図書館』京都大学図書館情報学研究会発行, 日本図書館協会発売, 2007 年 7 月, 251p.
(4) 呉建中・邱五芳・金暁明・範并思・沈麗云著, 沈麗云・櫻井待子・川崎良孝訳『中国の図書館と図書館学：歴史と現在』京都大学図書館情報学研究会発行, 日本図書館協会発売, 2009 年 7 月, 177p.
(5) 金暁明・沈麗云・章騫・川崎良孝著『上海図書館とアウトリーチ・サービス』（*KSP* シリーズ 9）京都大学図書館情報学研究会発行, 2009 年 4 月, 47p.
(6) 川崎良孝編著, 上海科学技術情報研究所信息諮問与研究中心・MIRU 研究グループ作成『揚子江デルタ地域の公立図書館：調査報告書』（*KSP* シリーズ 10）京都図書館情報学研究会発行, 2010 年 5 月, 77p.
(7) 川崎良孝・徐瑛・劉暁丹・徐宏宇『中国公共図書館の評価システムと現状』（*KSP* シリーズ 12）京都図書館情報学研究会発行, 2011 年 5 月, 88p.
(8) 呉建中著, 川崎良孝・櫻井待子・桑原千幸・沈麗云訳『上海の図書館と社会：1840-1949 年』京都図書館情報学研究会（近刊）

(1)『21 世紀の図書館を考える』は呉建中（当時は上海図書館副館長、現在は館長）の図

書の翻訳で、それに呉が最新の中国図書館の状況を加筆し、塩見昇と筆者が最近の日本とアメリカの状況を加えたものである。この呉の原書は中国で注目を得ただけでなく、台湾でも翻訳刊行された。この本は絶版になってしまった。(2)『調査研究サービスの理論と実際』は上海図書館と合体した上海科学技術情報センターが実施しているサービスの内容を具体的に示したものである。このサービスを利用しているのは中国の政府関係機関が中心で、日系企業も多い。いわば有料のシンクタンクである。(3)呉建中『21 世紀の図書館』はもともとが英語の図書で、(1)『21 世紀の図書館を考える』をさらに展開し、そののちの動きを加えたものである。(4)『中国の図書館と図書館学』は、各領域の専門家に執筆をお願いし、全体として中国の図書館と図書館学の歴史と現状が俯瞰できるように意図したものである。したがって、この図書は中国語の図書の翻訳ではなく、日本語の読者のために書き下ろしたものである。(5)『上海図書館とアウトリーチ・サービス』は写真がたくさん入った報告書で、上海図書館の多様な活動を紹介している。この報告書は絶版になってしまった。これは中国の大学のアウトリーチ活動を調査した報告書（劉暁丹・庄盛・川崎良孝『中国大学におけるアウトリーチ活動に関する調査報告書：復旦大学と華東師範大学を事例として』（平成 20 年度総長裁量経費研究プロジェクト「大学のアウトリーチ活動の方法開発に関する教育学研究：日中独比較研究を通して京都大学の可能性を探る」個別研究報告書 No. 2）2009 年 1 月）の姉妹版である。(6)『揚子江デルタ地域の公立図書館』は上海から南京にいたる地域を取り上げ、公共図書館の基礎的な実態を解明しようとしたものであり、昆山市図書館についての実地調査を含んでいる。最後の(7)『中国公共図書館の評価システムと現状』は、中国の公共図書館の基準が変化し、その最新版を翻訳して紹介したものである。数値基準は中国公共図書館の現状を浮き彫りにする結果となっている。なお現在進行中の(8)『上海の図書館と社会』は上海の複雑な図書館の歴史を 1840 年（開港）から 1949 年（中華人民共和国の成立）までまとめた英語の文献で、イギリスのウェールズ大学（University of Wales）図書館情報学大学院に博士号請求論文として提出された業績である。

3

このようにこれまでは翻訳や個別の図書館の調査、さらには揚子江デルタ地域という一定の広がりを視野に入れた基礎的な調査を行ってきた。そうした調査や翻訳は公共図書館をもっぱら対象としてきたのだが、今回は大学図書館を調査対象とした。中国の大学は積極的に統合や施設の新築、改築、増築を行っており、それは当然ながら図書館にも当てはまる。そうした環境下で、日本でも大学図書館界で共通用語になっている「インフォメーション・コモンズ」や「ラーニング・コモンズ」という概念とその実践が、どの程度に中国の大学図書館に反映されているか調べることにした。幸運なことに、上海を中心とする華東地域はラーニング・コモンズを図書館という場に取り込んだ先進地域であり、今回は上海市内の大学図書館に焦点を絞ることにした。

調査項目の作成は呑海沙織（筑波大学図書館情報メディア研究科）が担当し、これまでに呑海らが用いてきた調査票を用いて、国際的な比較ができるようにし、それを中国側の調査担当チームの劉暁丹・徐宏宇（上海図書館上海科学技術情報研究所・情報諮問研究センター）が、中国の大学図書館の実情に合うように修正や削除を行って調査票を作成した。また実地に訪問調査も行っている。そして日本語への翻訳を担当したのが李霞（京都大学大学院教育学研究科博士課程）で、博士論文執筆中の忙しい時期に時間をさいていただき感謝している。

日本と相違して、大学図書館のデータが公開されていてすぐに最新情報が入手できるというわけではなく、電子メールで調査票を送って回答が得られるということでもない。一見すると、本調査は簡単なように思われるが、思いのほか多くの時間、労力、資金が必要だった。そうした点はともかく、本報告書が日本の図書館にも参考になることを願っている。

川崎良孝

2012 年 7 月 1 日

目　次

はじめに

第 1 章　研究の背景 3

第 2 章　アンケート調査研究 5

2.1　大学図書館で提供される資料 5

2.2　大学図書館の学生スタッフ 7

2.3　大学図書館と他部署との連携 8

2.4　大学図書館におけるラーニング・コモンズ 9

2.5　大学図書館における学習支援サービスの必要性 11

第 3 章　事例研究 13

3.1　上海視覚芸術学院 14

3.2　復旦大学 16

3.3　上海師範大学 18

第 4 章　考察 21

第 5 章　「中国の大学図書館の学習支援に関する調査報告」について（呑海沙織） 23

おわりに 33

京都図書館情報学研究会の出版物

図表一覧

図表 1　大学図書館で提供される資料 5
図表 2　大学図書館の設備 6
図表 3　大学図書館におけるサービス 7
図表 4　大学図書館における学生スタッフのサービス及び研修 8
図表 5　大学図書館と他部署との連携 9
図表 6　大学図書館におけるラーニング・コモンズの設置及び理由 10
図表 7　大学図書館におけるラーニング・コモンズのサービス内容 10
図表 8　大学図書館における学習支援サービス提供の必要性 11
図表 9　上海視覚芸術学院におけるラーニング・コモンズ（写真） 14
図表 10　上海視覚芸術学院におけるラーニング・コモンズの配置 15
図表 11　復旦大学におけるラーニング・コモンズ（写真） 17
図表 12　復旦大学におけるラーニング・コモンズの構造 17
図表 13　上海師範大学におけるラーニング・コモンズの配置 18
図表 14　日本の大学図書館におけるラーニング・コモンズの設置年 26
図表 15　日本の大学図書館におけるラーニング・コモンズを構成する要素 27
図表 16　ラーニング・コモンズに関する要素の理想と実際 28

中国の大学図書館における学習支援に関する調査報告

第 1 章

研究の背景

研究背景

調査目的

中国の大学図書館における学習支援に関する資料提供、設備、サービスなどの現状を明らかにするために、上海図書館上海科学技術情報研究所の調査チーム（MIRU）は 2011 年 10 月から 2012 年 1 月までの間、上海の大学図書館における学習支援に関するアンケート調査を行った。調査によって、質及び量の両面から中国の大学図書館における学習支援の現状やその発展の趨勢を明らかにする。

調査方法

アンケート調査（メールによるアンケート調査、及びアンケート用紙の配布の 2 つの方法で調査を行った）。

調査サンプル

上海の規模や類型の異なる 21 の大学を対象とした。詳細は以下のとおりである。

大学名	類型	学生数（人）	蔵書量（万冊）	館員数（人）
同済大学	総合	63,200	588	100
复旦大学	総合	47,504	500	200
上海交通大学	総合	75,000	380	196
東華大学	総合	37,000	337	97
上海大学	総合	48,775	470	220
華東理工大学	理工	51,354	335	106
上海理工大学	理工	22,600	160	55
上海工程技術大学	理工	18,260	147	37

上海海事大学	理工	23,806	110	58
上海電機学院	理工	12,000	90	30
上海外貿学院	経済	11,500	230	61
上海財経大学	経済	15,000	201	60
上海商学院	経済	10,000	160	13
華東師範大学	師範	52,000	400	200
華東政法大学	政治法律	23,700	210	97
上海外国語大学	言語	11,000	200	40
上海海洋大学	農林	17,600	100	38
上海中医薬大学	医薬	9,388	65	65
上海劇学院	芸術	2,822	50	28
（复旦大学）上海視覚芸術学院	芸術	3,600	5	17
上海師範大学	師範	42,117	406	130

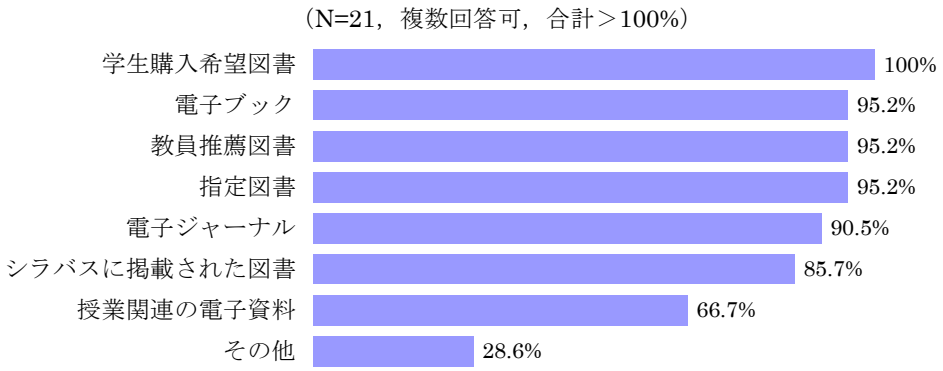
第2章

アンケート調査研究

问卷调查研究

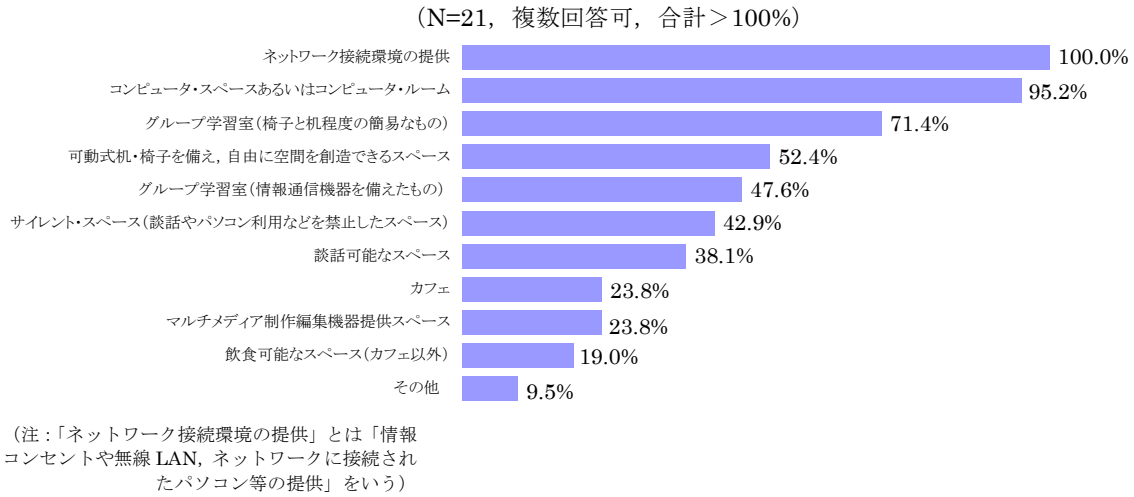
2.1 大学図書館で提供される資料

アンケート調査から上海における大学図書館で提供されている資料のほとんどは、当該大学に設けられている学科や専攻と関連のあることが明らかとなった。回収された回答から、「学生購入希望図書」の割合が最も高く、また、調査対象の 21 校のすべて（100%）が学生購入希望図書を購入しているため、学生の要求は大学図書館の資料購入に大きな影響を与えていることがわかる。その他に、電子書籍や教員推薦図書も高い割合（95.2%）を示している。また「シラバスに掲載された図書」（85.7%）、「授業関連の電子資料」（66.7%）も比較的高率であり、図書館が学習支援に積極的なことがわかる。なお調査対象の 28.6%を占める大学図書館において提供される資料の中に、「当該大学の修士・博士論文」などが含まれる。さらに同済大学の場合、「特別に収蔵する文献及び特集テーマのピクチャー展」などの資料も提供される資料の中に含まれており、大学図書館で提供される資料は、大学の特色や都市計画と大きな関連性を示す一例となる。



図表 1　大学図書館で提供される資料

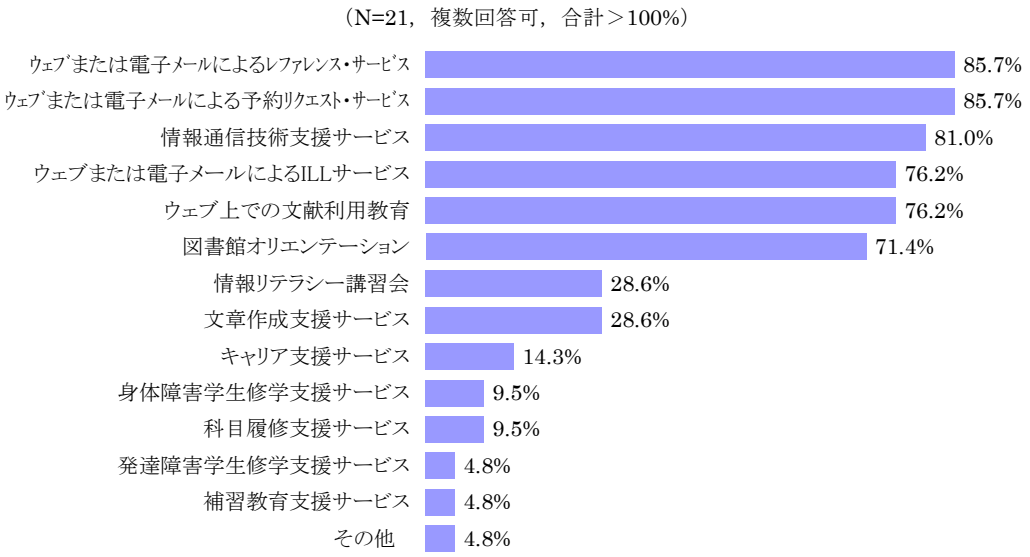
中国における大学図書館の価値は，教員と学生の学習や交流に便宜を提供することにある。現在、中国の大学図書館は館内環境の設計において、合理性・実用性とともに、学生に蔵書、貸出、閲覧及び休憩の一体化した多機能スペースの提供を目指している。アンケート調査の結果（図表 2「大学図書館の設備」参照）から、すべての調査対象において「ネットワークに接続する環境を提供している」（100%）ことが確認された。また、「サイバースペースあるいはコンピュータ室」の配置率も 95.2%に達しており、ここ数年、インターネットの中国での急激な発展と普及に密接に関わっていることがうかがえる。その他にも「グループ学習室」の配置率が高く、「簡易なグループ学習室」の配置率は 71.4%、「コンピュータを配置したグループ学習室」も 47.6%に達している。しかし大学図書館によって、配置されている「グループ学習室」の数は 1 室から 26 室まで大きな差があることも明らかとなった。そして、調査結果から、調査対象の 52.4%を占める大学図書館において、利用者にいっそう多くの自由空間を提供する傾向にあること、また、調査対象の約 40%を占める大学図書館は利用者に静かな空間（42.9%）あるいは交流の空間（38.1%）を提供していることが確認された。このように、多くの図書館は伝統的サービスの提供とともに、図書館の交流機能を意識していることがうかがえる。一方、調査結果によって、調査対象の 20%を占める図書館が、利用者に「カフェ」（23.8%）あるいは「飲食可能なスペース」（19.0%）を提供していることが判明した。また、いくつかの大学図書館は利用者に「露天のグリーン空間」、「専門家研究室」を提供していた。



図表2　大学図書館の設備

大学図書館のサービス対象は主に学生であるため、学生の需要に応じて、多様なサービを提供しなければならない。調査対象の回答（図表 3「大学図書館におけるサービス」参照）から、図書館で提供されている伝統的なサービスである「ウェブまたは電子メールによるレファレンス・サービスや予約サービス」が 85.7%に達していることが判明した。その他に、伝統的な図書館サービスのモデルである「情報通信技術支援サービス」（81.0%）、「ウ

ェブまたは電子メールによる ILL サービス」（76.2%）、「ウェブ上での文献利用教育」（76.2%）、「図書館オリエンテーション」（71.4%）なども高い割合を占めている。一方、特色あるサービスの提供を行う大学図書館の割合が非常に低いことは、「キャリア支援サービス」（14.3%）、「身体障害学生修学支援サービス」（9.5%）、「科目履修支援サービス」（9.5%）、「発達障害学生修学支援サービス」（4.8%）、「補習教育支援サービス」（4.8%）という結果からうかがえる。なお調査した大学図書館の中には、大学教員に限定して提供される特許の検索サービスを実施する図書館もあった。



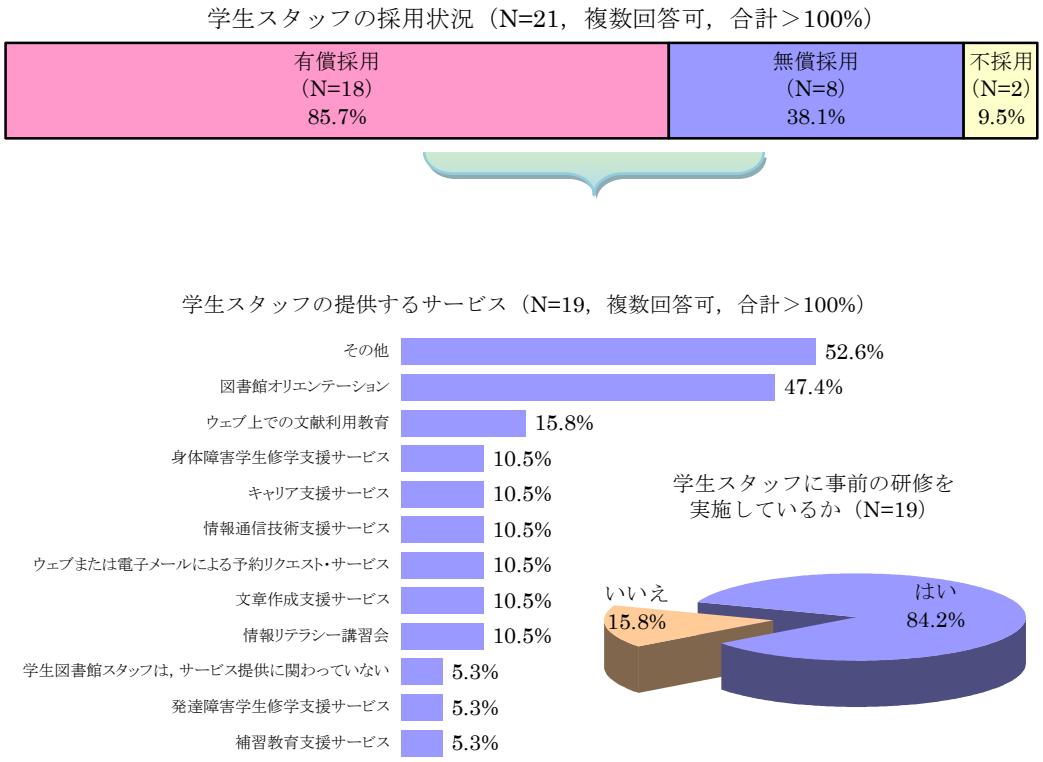
図表3　大学図書館におけるサービス

2.2 大学図書館の学生スタッフ

中国の大学図書館における学生スタッフとは、図書館業務に興味を持ち、責任感を示し、図書館員の指導のもとで、授業の余暇を利用し、進んで図書館の各業務に参加する選抜された大学生のことである。調査によると、調査対象である 21 校の大学において、学生スタッフを採用していないのは 2 校のみであった。その他の 19 校は、学生スタッフを有償、あるいは無償で採用しており、さらに有償と無償のスタッフが併存する大学もあった（図表 4「大学図書館における学生スタッフのサービス及び研修」参照）。

学生スタッフの役割について、「図書館オリエンテーション」と回答した図書館は、学生スタッフを採用している大学図書館の約半数（47.4%）に達している。半数を占める「その他」（52.6%）では、「資料の貸出サービス」、「図書目録の作成」、「棚上げ、棚卸を行う際の補助」など伝統的なサービスに加えて、「アンケート調査」、「データベースに関するレファレンス業務」、「図書館業務に対する検査及び監督」など非伝統的なサービスに対する回答

も確認された。さらに、「清掃」、「当番」など簡単な作業を学生スタッフに当てているとの回答もあった。学生スタッフに対する事前の研修について、学生スタッフを採用している19 校の回答をみると、事前研修を行っている大学の比率は 84.2%であった。その研修内容も多様で、主に職務技能の育成や、労働規律の育成、図書館に関する専門的知識の研修（たとえば図書館の分類法、図書の棚上げ、資料の貸出サービス、図書館利用に関する諮問に対する回答、RFID の利用）などである。

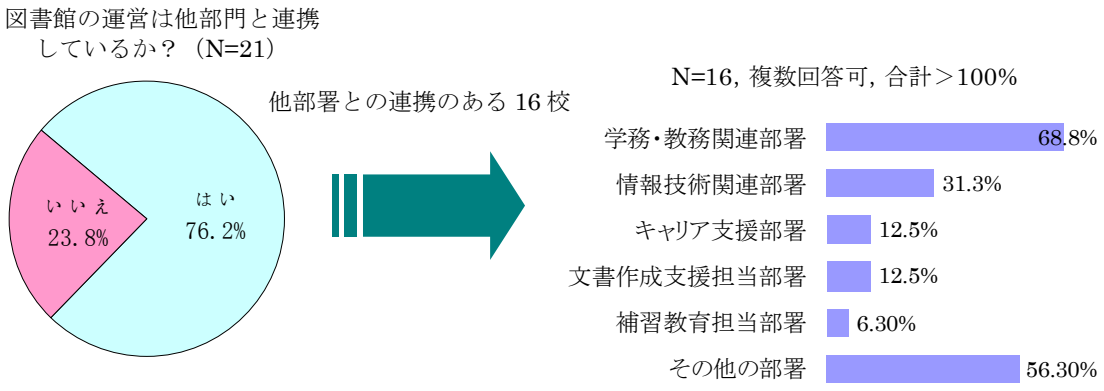


図表4　大学図書館における学生スタッフのサービス及び研修

2.3 大学図書館と他部署との連携

大学図書館は，他部署と連携することでより多くの利用者にさまざまな特色のあるサービスを提供することが可能になる。アンケート調査によると、調査対象の 21 校のうち、他部署との連携関係を持つ大学図書館が 16 校あり、調査対象の 76.2%を占めている（図表 5「大学図書館と他部署との連携」参照）。図書館と連携関係を持つ部署の中では、教務関連部署の占める割合が最も高く（68.8%）、教務関連部署は主に大学図書館の資料購入に対してリクエストをすることで連携を保つという。教務関連部署の次に大学図書館と高い連携を結んでいる部署は情報技術関連部署（31.3%）である。一方、キャリア支援部署（12.5%）、文書作成支援部署（12.5%）、補習教育担当部署（6.3%）は図書館との連携が低い傾向にある。これらは前述した図書館で提供されるサービスに関する調査結果との一致を示してい

る。さらに、調査対象の回答から、図書館との連携関係を結ぶ部署として学生部、共産主義青年団委員会、科学研究所、文書館、試験センターなどが挙げられている。特に華東理工大学図書館の場合、企業と一定の連携関係を結んでいる。



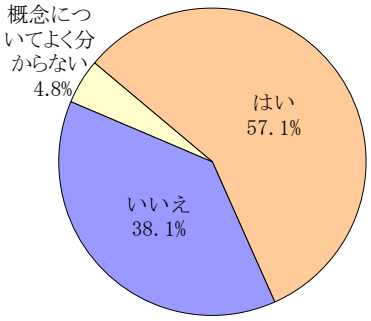
図表 5　大学図書館と他部署との連携

2.4 大学図書館におけるラーニング・コモンズ

ラーニング・コモンズ（Information Commons）という概念は、2005 年に上海図書館長の呉建中教授によって初めて中国に導入され、ここ数年、中国国内の大学図書館で広く使われるようになった概念である。2006 年、(复旦大学) 上海視覚芸術学院で情報ラーニング・コモンズが正式にオープンされたが、これはラーニング・コモンズの理念が実践された初めての例である。現在、中国では数十の図書館がラーニング・コモンズの構築を試みており、一定の成果を得ている。ラーニング・コモンズを構築する大学の図書館数が多くなり、大学図書館の発展の趨勢の一つとなりつつある。

調査対象の 21 校の大学のうち、12 校はすでにラーニング・コモンズを設けており、ラーニング・コモンズという概念を認識していない大学は 1 校であった（図表 6「大学図書館におけるラーニング・コモンズの設置及び理由」参照)。すでにラーニング・コモンズを設けた 12 校の大学図書館のうち、蔵書冊数が 300 万冊以上である大規模図書館を持つ大学は 6 校ある。ラーニング・コモンズを設置した理由のうち、「図書館からの提案」は 91.7%で、「図書館の新設・改築」は 58.3%となっている。大学図書館におけるラーニング・コモンズの呼称を「研究討論室」（研讨室)、あるいは「情報ラーニング・コモンズ」（信息共享空间）とする場合が多く、一方、「図書館のブックカフェ」（图书馆书吧）という呼び名や、専門性によって名前がつけられたり、ラーニング・コモンズが図書館の伝統的機能を果たす部門に溶け込むケースもある。

ラーニング・コモンズ設置の有無
（N=21）



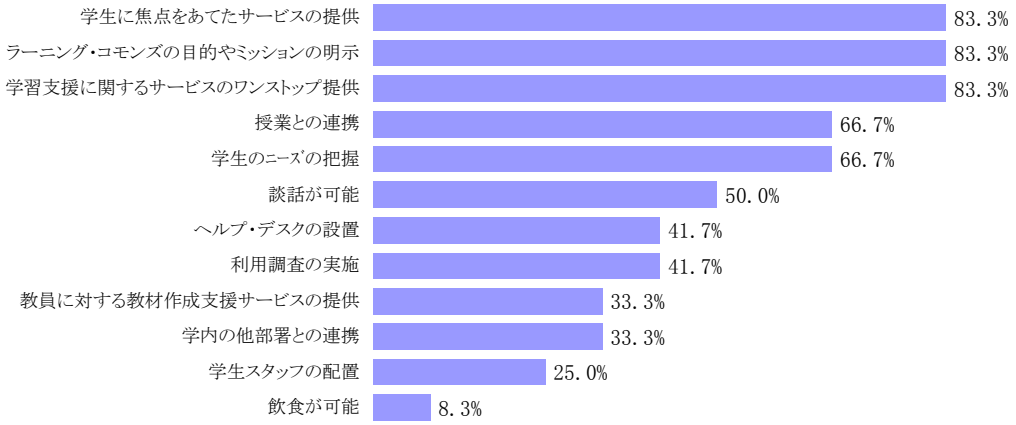
ラーニング・コモンズを設置した理由
（N=12）

選択項目	回答数（件）	（%）
図書館からの提案	11	91.7
図書館の新設・改築	6	58.3
大学の方針	7	33.3
学生からの提案	1	8.3

図表 6　大学図書館におけるラーニング・コモンズの設置及び理由

ラーニング・コモンズを設置している 12 校の大学図書館によって提供されるサービスをみると（図表 7「大学図書館におけるラーニング・コモンズのサービス内容」参照）、「学生に焦点をあてたサービスの提供」（83.3%）、「ラーニング・コモンズの目的やミッションの明示」（83.3%）、「学習支援に関するサービスのワンストップ提供」（83.3%）が挙げられる。そのほか、「授業との連携」（66.7%）、「学生のニーズの把握（アンケート調査やインタビュー調査を行う）」（66.7%）、「談話が可能」（50.0%）についても調査対象の半数を上回る大学図書館が実施していた。

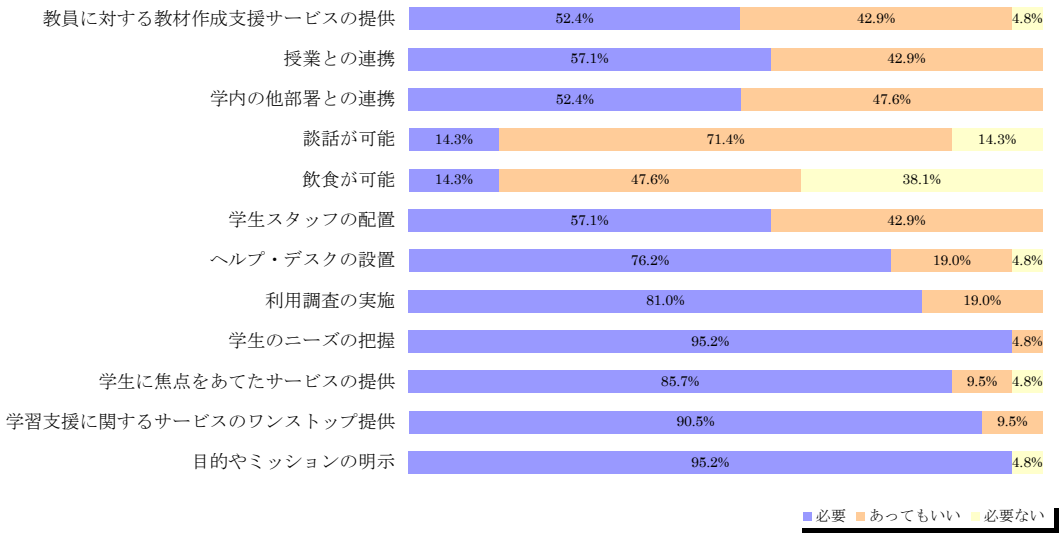
（N=12，複数回答可，合計＞100%）



図表 7　大学図書館におけるラーニング・コモンズのサービス内容

2.5 大学図書館における学習支援サービスの必要性

図表 8「大学図書館における学習支援サービス提供の必要性」において、最も必要として回答された項目には「目的やミッションの明示」(95.2%)、「学生のニーズの把握（アンケート調査やインタビュー調査の実施)」(95.2%)、「学習支援に関するサービスのワンストップ提供」(90.5%)、「学生に焦点をあてたサービスの提供」(85.7%) が挙げられる。一方、必要でないと回答された項目としては,「飲食が可能」(38.1%は飲食が必要でないと主張)、「談話が可能」(14.3%)、「ヘルプ・デスクの設置」(4.8%)、「教員に対する教材作成支援サービスの提供」(4.8%) が挙げられている。



図表 8　大学図書館における学習支援サービス提供の必要性

第3章

事例研究

案例研究

海外ではラーニング・コモンズに関する研究は北米を中心に 1990 年代頃に始められ、今日まですでに 10 数年間の研究が続けられたため、理論研究の成果も多く獲得されている。論文だけではなく、各種の調査研究報告や専門著書も発表されている。また、実践の面においても、理論研究に勝る発展が遂げられてきた。

一方、中国におけるラーニング・コモンズに関する研究は海外に後れをとっている。現在、中国におけるラーニング・コモンズに関する研究と実践は、主に香港・マカオ・台湾地区と大陸地区の 2 つの地域に分けられる。中国の香港地区では 1990 年代末からラーニング・コモンズを取り入れ始めた。中国台湾地区と中国マカオ地区の多くの図書館の場合、現在ラーニング・コモンズ を展開したサービスを行っているが、理論研究はほとんど行われていない。他方、中国大陸においては、ラーニング・コモンズに関心を示しているが、研究に着手したのはここ数年のことである。したがって理論面と実践面ともに初期の段階にある。それにもかかわらず、数多くの図書館がすでに実践活動を始めている。復旦大学の上海視覚芸術学院、上海師範大学、上海交通大学、復旦大学、中国科学院国家科学図書館、北京大学、清華大学、国家図書館がその例である。

中国におけるラーニング・コモンズは、その土台となるものや、提供されているサービスの形態によって以下の 3 つのタイプに分類される。第 1 に、電子閲覧室に基づくものである。例えば（復旦大学）上海視覚芸術学院、復旦大学江湾校区、上海師範大学など、いくつかの改良があったとはいえ、全体的な資源組織やサービス内容は従来の閲覧室に似ているが、新たに物理的なスペースをデザインし、情報資源を統合し、利用者にワンストップで情報の提供を行うタイプである。第 2 に、マルチメディア・サービスを主な資源として、ソフト・ハードウェアの施設ともマルチメディアの製作、リクエストと鑑賞に重点をおくとともに、ラーニング・コモンズの理念を導入するタイプである。この類型において、北京大学と清華大学は最も典型的な例として挙げられる。清華大学のラーニング・コモンズでは、1 つの討論学習スペースと 1 つの録音・録画スペースが含まれる。一方、北京大学は「メディア・コモンズ」（Media Commons）と称するスペースを設け、そこには 1 つのマルチメディア学習センターと 1 つのマルチメディア研究討論室を含み、この「メディア・コモンズ」が専門のマルチメディア資源部に管理されている。第 3 に、ラーニング・コモ

ンズの理念やサービスモデルを参考に新しい図書館を建設するタイプがある。上海交通大学と暨南大学図書館の新館を代表とする。このタイプは、新しい図書館を建設する当初にラーニング・コモンズの理念が導入され、全面的な開放やサービス体系が推進され、図書館のサービスにおいて「蔵書、検索、貸出、閲覧、参考資料」が統合された有機的なサービス構造になるように目指された。このタイプは図書館全体をラーニング・コモンズに作り上げることを目標とする。

当アンケート調査は、ラーニング・コモンズに関連する質問項目が多いため、いくつかの大学図書館のラーニング・コモンズについて実地調査を行った。

3.1 上海視覚芸術学院

2006 年、上海視覚芸術学院（复旦大学）は附属図書館に属する図書文化センターの 2 階を改築し、約 500 平方メートルのスペースをラーニング・コモンズとして利用者に開放した。ラーニング・コモンズの実験拠点として、上海視覚芸術学院は中国国内において初めてラーニング・コモンズ理念を実践する大学図書館となった。

図表 9　上海視覚芸術学院におけるラーニング・コモンズ（写真）

ラーニング・コモンズでは、インフォメーション・センター（大型液晶パネルを設置し、新しく購入した資料の情報、開講予定の講座の通知、利用者の問い合わせに対する回答などを放映する）が設けられ、グループ学習室（ガラス扉を使用）が 2 つ、30 人収容の多機能室（少人数授業、芸術作品に対する評価会、小規模な討論会などに利用される）が 1 つ開放され、図書や雑誌の閲覧に使用されるテーブルや椅子（座り心地の良いソファー）や、50 数台の高性能デスクトップ・コンピュータ（常用のソフトウェア、インターネット、イヤホン）が配置されている。また、定期刊行物 4,000 冊に、1.5T の電子データベース、そして印刷、コピーおよびスキャンするための設備も配置されている。さらに研究討論に映画・テレビを観賞できる 50 人収容のホールも設置されている。ラーニング・コモンズの隣に小型休憩室が設けられ、そこで利用者は飲食、談話が可能となる。ラーニング・コモンズには、図書館員 1 名に、技術指導 1 名、文献の取り寄せ担当 1 名、学生スタッフ 2 名が配置されている。

図表 10　上海視覚芸術学院におけるラーニング・コモンズの配置

<table>
<tr><th>配置</th><th colspan="2">具体状況</th></tr>
<tr><td>模擬層</td><td colspan="2">● 情報資源：電子データベース、視聴覚データベース、特色データベース
● ネットワーク・ソフトウェア施設：芸術設計、ビジュアル・コミュニケーション、映画・テレビ放送関連のソフトウェア
● さまざまなコーナー：読書会、視聴覚サロン
● お薦めコーナー：書評、映画評論</td></tr>
<tr><td rowspan="3">実体層</td><td>物理空間</td><td>● フロント
● 学生に開放した資源獲得エリア
● 討論室
● 多機能の展示ホール
● コンピュータ・エリア
● 視覚エリア
● 休憩エリア</td></tr>
<tr><td>ハードウェア施設</td><td>IBMコンピュータ40台、多機能プリンタ複合機、無線LAN</td></tr>
<tr><td>人力資源</td><td>● レファレンス担当の職員1名
● ITエンジニア1名
● 学生スタッフ2名
● 文献の取り寄せ担当職員1名</td></tr>
<tr><td>支援層</td><td colspan="2">● 情報技術：RSS、新しいメディアなどの技術を試みる。</td></tr>
</table>

	● 組織と管理：責任者1人で、多人数参加の運営モデルを採る。 ● 評価：年に1回アンケート調査を行う。 ● 文化と精神：オープン式

学院はラーニング・コモンズにおけるサービスについて学生にアンケート調査を行った。調査結果から、ラーニング・コモンズが高い人気を集めた理由として、「交流方法が便利なこと」、「資源が豊富なこと」、「快適な環境を有すること」、「先進的な学習施設であること」、「職員のサービス態度がよいこと」、「ワンストップ式サービスモデルであること」などが挙げられている。一方、ラーニング・コモンズの責任者に対して、いくつかの問題への改善を求める声も上げられた。具体的には、情報の利用に対する指導、設備の故障を直ちに修理すること、無線 LAN の整備、延長コンセントの提供、討論室などの防音、USB メモリを使って資料のダウンロードを行えるようにすることなどが求められた。

3.2 復旦大学

復旦大学江湾キャンパス附属図書館は、ラーニング・コモンズを中核機能として建造されることをきっかけに、全館規模の情報サービスエリアを作り上げようとした。その背景には、ラーニング・コモンズは単なる物理的な空間ではなく、新しいサービス理念と思想を実行する場であり、サービスモデルの革新であるとの考えがあった。そこで、ラーニング・コモンズの要素を全館のサービスと管理に一貫させ、資源に対して有効な統合を行い、サービスを革新することで、ラーニング・コモンズを構築することが目指された。

(1) 実施過程

2006 年、江湾キャンパスでラーニング・コモンズを創設することが計画された。同年末、関連プロジェクトが確定し、ラーニング・コモンズに関連するプロジェクト・チームが結成された。

プロジェクト・チームは 2007 年 2 月から 3 月にかけて、図書館サービスを普及するための広報とともに、利用者の需要を把握することによって、ラーニング・コモンズを構築する目的と適性を高めるために、全校でラーニング・コモンズに対する初回のアンケート調査を実施した。調査によって 2,045 の回答が回収された。調査に協力した学生は 54 の学部に分布し、全校のほとんどの学院と専攻を網羅していた。

2007 年 4 月から、ラーニング・コモンズの建設が検討され始めた。同時に、ラーニング・コモンズに関連する理論と実践についての追跡調査も行われた。同年 8 月、当該プロジェクトは復旦大学の「金苗」基金を獲得した。

2008 年 4 月から 5 月にかけて、最初に江湾キャンパスに入った法学部及び先端材料実験室の教員と学生を対象にアンケート調査を行い、564 の回答が回収された。これらのデータ

が新館の建設及び提供するサービス内容の基礎的データとなり、これらのデータをもとに、江湾キャンパスの新館において、ラーニング・コモンズの建設や提供するサービスとともに、利用者の需要についての分析も行われた。このことは「利用者中心」、「学術科学研究サービス」を特色とする江湾新館の構築の基礎に定められた。

2008 年前半、新館の開館計画及びサービス内容が企画された。

2008 年 9 月に、新館は正式にオープンされた。

図表 11　復旦大学におけるラーニング・コモンズ（写真）

（2）建設体系

図表 12　復旦大学におけるラーニング・コモンズの構造

資源体系	関連状況	
物理資源	ハードウェア資源 ソフトウェア資源 文献資源（印刷用資源）	ラーニング・コモンズ・エリア、研修室、協同学習室、休憩エリア、カフェ、セルフ印刷室
社会資源	ラーニング・コモンズ普及協調チームを設置し、図書館の伝統職能部署、大学の各学部、行政機関、社会団体、研究チームなどとの協調および宣伝・普及に関する職務を担当する。	
データ資源	● Web 環境の建設：インターネット環境及び情報量に対する振り分け、分類と統合を行うことで、利用者にさらなる高い効率のサービスを提	

	供する。 ● データベース図書館：各類の電子資源を統合し、秩序のあるデータベースを建設する。 ● オンライン学習環境と道具：教育資源を統合する。
人文資源	● 人的資源：責任者及び管理者、レファレンス担当の図書館員、IT 技術者、各学科の専門館員、オンライン・レファレンス担当の図書館員、各活動の組織及び協調するための人員、図書館職員 ● 組織モデル：単一部署。業務施行の形態はグループ形態で行う。 ● 奨励体制：図書館員に業務能力を高めるための研修を励行し、良好な科学研究を行う環境を整え、協調した団体意識を培い、チーム全体の潜在力を引き出し、定期的に職員の研修を行う。

江湾新館の場合、ラーニング・コモンズに関する理念が全館のサービスと管理に応用されており、ラーニング・コモンズが 1 つの独立した物理的空間として設置されているのではなく、図書館の隅々までラーニング・コモンズの理念と図書館の伝統的サービスとの融合が図られている。すなわち、図書館の伝統的な図書中心の閲覧室、新聞雑誌専門の閲覧室などをラーニング・コモンズに取り込んでいる。ラーニング・コモンズに伝統的な図書資源の要素を充実させることで、中国国内の利用者の学習習慣と形態に適合することに努めている。

3.3 上海師範大学

上海師範大学におけるラーニング・コモンズは、2007 年 11 月に全校の教師と学生を対象にサービスの提供を開始した。ラーニング・コモンズは上海師範大学奉賢キャンパス附属図書館に位置し、面積は約 1,200 平方メートルで、図書館の情報研究開発部に属している。このラーニング・コモンズでは、インターネット、コンピュータのハードウェアの施設及び多種多様な文献資源が統合されている。また、弾力性のある電子設備を備えた教室やグループ研究のための討論室の新設、利用者に学習の指導や科学研究技能を高めるためのレファレンス・センターの設置、利用者にマルチメディアの開発・応用の指導に当たるデモンストレーション・エリアを設けることでサービスの提供を行っている。

図表 13　上海師範大学におけるラーニング・コモンズの配置

配置		情報ラーニング・コモンズ
空間	閲覧席	480 席
	エリア区分	レファレンス・エリア、グループ討論エリア（5 室）、文献資源エリア、利用者研修エリア、個人学習エリア、文献コピーエリ

		ア、休憩閲覧エリア、視聴覚実演エリア
資源	情報資源	データ化資源（各種データベース、及び各種情報資源、専門のコースウェア）、文献資源
	コンピュータ	ネットワーク検索用コンピュータ 36 台、オフィス・オートメーションのソフトウェア、マルチメディアのソフトウェア、ホームページ作成ソフト、読み込み用ソフトウェアなど
	その他の設備	プリンタ、コピー機、スキャナー、書き込みドライブとプロジェクターなど
	人力資源	レファレンス業務を担当する図書館員、専門技術者
サービス	レファレンス業務	専門知識を持つ図書館員及びブロガー（Blogger）
	技術サービス	学生は各種の設備の使用過程で直面した様々な問題を解決する
	研修	学生に情報技能の研修を行う

グループ討論に対するサービスを取り上げると、図書館によってサービス形態がさまざまである。ほとんどの図書館において、コンピュータ、プロジェクターなどの設備が提供され、それらを無料で予約して使用することが可能である。一方、上海師範大学附属図書館の特色は、ネットワーク上で討論に参加できるサイトを開放することで、いっそう多くの利用者の参加を可能にしたことである。上海師範大学附属図書館のウェブサイト（http://www.lib.shnu.edu.cn/）におけるラーニング・コモンズのプレートをみると、学科専門の Blogger、ラーニング・コモンズ概況、討論室、問い合わせなどの欄が設けられている。ユーザーが「討論室」という模擬の空間に進入することで、さまざまなテーマをめぐってネットワーク上での討論に参加できる。このようなサービスを通して、図書館サービスと各学院の教育実験との一体化が実現されることとなった。

第4章

考察

意見建议

本報告の調査範囲は上海としている。その理由は上海の大学がラーニング・コモンズの先進地域だからである。ラーニング・コモンズが最初に華東地域（上海を中心とする広い地域）の大学に現れたことは、けっして偶然ではない。この地域でラーニング・コモンズという先進的な理念がいち早く受け入れられ、かつこの地域が強い経済力を持っていることが大きな要素である。上海の場合、大学は経費などを十分に確保でき、その上、近年、大学の統合を図るために大学の改築や拡張が多く行われ、ラーニング・コモンズの建設と管理を実行できる空間が提供されている。しかし全体的にみれば、中国ではラーニング・コモンズの実践は、依然として探索段階にあることが明らかである。

調査対象の 21 校の大学に対するアンケート調査から、「大学図書館における学習支援サービス」に対する要望は、主に資源配分、空間の配置、サービスの対象、利用の合理性及びスタッフに対する要求に集中している。具体的内容は以下のようになっている。

(1) 資源配分のさらなる多元化

- ラーニング・コモンズと模擬空間の関連性が明確でない。「ラーニング・コモンズ」と大学教育や科学研究との歩調の一致が必要である。
- 電子ビューワーの普及に伴い、「ラーニング・コモンズ」における無線 LAN 設備の充実を重視すべきである。
- 図書館は大学における第 2 の教室であるため、図書館はすべての教育、科学研究に関連する利便性のあるサービスを提供すべきである。
- 図書館はさまざまな設備を配置すべきである。例えば，コンピュータ、プロジェクター、電源など。

(2) 空間の使用はさらに利用者の要求を反映すること

- 一部の新築された大学図書館において、数多くの学習室が設けられているものの、ほとんどの時間閉鎖されており、有効利用されていない。
- 暨南大学附属図書館の事例に学び、「ラーニング・コモンズ」にネットワーク上で

の予約を行い、図書貸出カードを使って自由に「ラーニング・コモンズ」に入れるようにする。

- 清潔で快適な図書館環境を維持する。

(3) 空間の配置のさらなる合理化

- 大学や図書館の実状を勘案して、合理的に「ラーニング・コモンズ」をデザインする。
- 私語禁止エリアと談話エリアを設置して、利用者の多様なニーズに対応する。

(4) サービス対象のさらなる拡大

- ラーニング・コモンズは学生向きのサービスだけではなく、教員・学生間、教員・教員間に対するサービスも提供すべきである。

(5) 人員配置に対する要求

- 図書館における学習支援サービスの提供については図書館員に対する要求が高く、専門的な知識や経験を持つ図書館職員の配置が必要である。
- 「ラーニング・コモンズ」は名称や形に流されるだけではなく、図書館員、問い合わせサービスに携わる職員のさらなる介入が必要である。

(6) その他

- 広報の強化によって、教員や学生に教育や科学研究に対するラーニング・コモンズの影響と役割について充分に認識させ、積極的な利用を奨励する。
- 管理の強化によって、ラーニング・コモンズの有効利用を実現する。

大学図書館の伝統的なサービスと異なり、ラーニング・コモンズは利用者とのインタラクティブを強化し、利用者の需要に注目し、分散している各類の資源を１つの空間に統合して、利用者にサービスを提供する場所である。またそこで提供されるサービスの内容としては、情報資源の獲得、情報技術サポート、情報リテラシーを高めることを一体化する「ワンストップ」式サービスである。これらのサービスの提供によって、充分に図書館の空間、情報資源、専門的職員といった面における優位性を発揮できる。大学図書館におけるラーニング・コモンズの提供は、教育改革の中で新たに現れた協同学習の需要に適合させるものであり、今後も積極的にラーニング・コモンズの応用について考え続けなければならない。つまり、ラーニング・コモンズに対する新しい設計や実践、ラーニング・コモンズに関連する新たなサービスの事例を分析することで、ラーニング・コモンズの新しいサービスの可能性を実証し、ラーニング・コモンズの新たなサービスに対する展望ができる。ラーニング・コモンズの提供は図書館の魅力を高める図書館サービスの新しいモデルであり、新しい理念であるといえよう。

第5章

「中国の大学図書館の学習支援に関する調査報告」について

呑海沙織

本章では、大学図書館における新しい学習支援空間の概要、本調査の概要、調査結果からみることのできる上海の大学図書館におけるラーニング・コモンズの現状と課題についてまとめる。

5.1 大学図書館における新しい学習支援空間

1980 年代以降、情報通信技術の発展による学習メディアの多様化、教授法の変化、学習スタイルの変化などを背景に、北米を中心とした大学図書館の学習支援空間が大きく変わりつつある。当初、インフォメーション・コモンズ（Information Commons）として発展した学習支援空間は、その発展形としてのラーニング・コモンズ（Learning Commons）とあわせて大学図書館の学習支援を先導している。ラーニング・コモンズとは、主として学生を対象とし、さまざまな学習支援のためのサービス、資料、設備・施設をワンストップで提供する学習支援空間である。学生が主体的に問題解決を行い、グループ・ワークなどを通じて議論を深め、情報通信技術を効果的に活用するといった、新しいスタイルの学習・教授法に対応しているところに特徴がある。

北米におけるインフォメーション・コモンズの計画は、1987 年度のミシガン州ジャクソン・コミュニティ・カレッジ（Jackson Community College）にはじまるとされている。デジタル化されたツールやコンテンツなど、情報通信技術を統合的に活用するというインフォメーション・コモンズの考え方は、コミュニティ・カレッジや小規模なリベラルアーツ・カレッジの図書館によって早くから導入されてきた。

一方、研究図書館におけるインフォメーション・コモンズについては、2004 年の北米研究図書館協会（Association of Research Libraries: ARL）が参考になる[1)]。この調査では、回答館 74 館のうち、30%にあたる 22 館がインフォメーション・コモンズと回答しており、1995 年以前の設置が 5 館、1996 年から 2000 年の設置が 8 館、2002 年から 2004 年が 9

1) Haas, Leslie. and Robertson, Jan. *The Information Commons (SPEC Kit; 281).* Association of Research Libraries, 2004

館となっている。インフォメーション・コモンズ、その後、ラーニング・コモンズは北米において、あらゆるタイプのあらゆる規模の大学図書館において着実に増加している[1)]。

日本の大学図書館においても近年、ラーニング・コモンズが注目されるようになっており、ラーニング・コモンズを導入する大学が増加している。日本で最も初期にラーニング・コモンズを紹介した文献は、米澤の「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援」[2)]とされている。翌 2007 年にはお茶の水女子大学附属図書館に「ラーニング・コモンズ」と名付けられた学習支援空間が設置され、以降、大学図書館界においてラーニング・コモンズへ注目が集まるようになった感がある。

著者はこれまで、科研費プロジェクト（科学研究費補助金・基盤研究（B）課題番号 20402053「大学教育における『学び』の空間モデル構築に関する研究」研究代表者：溝上智恵子および、学術研究助成基金助成金（C）課題番号 23500296「学習支援空間における学生アシスタントの育成プログラム・モデルの構築」研究代表者：呑海沙織）の一環として、米国、カナダ、オーストラリア、韓国などの大学図書館における学習支援空間に関する現地調査を行ってきた。これらの調査結果をもとに下記のような論文を発表しており、これからもオーストラリアの事例などを発表予定である。

- 呑海沙織・溝上智恵子．北米の大学図書館における学習支援空間の歴史的変容．カナダ教育研究，8，2010.5，1-17.
- 呑海沙織・溝上智恵子．大学図書館における学習支援空間の変化：北米の学習図書館からラーニング・コモンズへ．図書館界，63(1)，2011.5，1-15.
- 呑海沙織・溝上智恵子．大学図書館のラーニング・コモンズにおける学生アシスタントの意義．図書館界，63(2)，2011.7，176-184.
- Saori Donkai, Atsushi Toshimori, Chieko Mizoue. Academic Libraries as Learning Spaces in Japan: Toward the Development of Learning Commons. The International Information & Library Review. 43, 2011, 215-220.

また、2010 年度には筑波大学大学院図書館情報メディア研究科プロジェクト研究の助成を受け、日本のすべての高等教育機関を対象に、図書館における学習支援空間に関する質問紙調査を行った。これは、日本のラーニング・コモンズを含む日本の大学図書館の学習支援空間に関するはじめての悉皆調査である。調査対象は、四年制大学および大学院大学 755 校、短期大学 217 校、高等専門学校 58 校であり、回収率はそれぞれ、69.8%、60.8%、65.5%であった。これらの調査結果は、下記に掲載予定である。

---

1) Bonnand, Sheila and Donahue, Tim. What's in a Name? The evolving library commons concept. *College and Undergraduate Libraries*, 17, 2010, 225-233

2) 米澤誠「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援」カレントアウェアネス，289，2006.9.20

・　呑海沙織・溝上智恵子．日本の大学図書館における学習支援の現状．大学図書館問題研究会論文誌，35，2012.8

5.2 上海の大学図書館における学習支援に関する調査概要

今回の上海における調査に使用した質問紙は、前節で述べた日本の調査に際して作成した質問紙から抜粋して作成された。質問内容は、下記のように三部から構成されている。

(1) 大学図書館において提供されている学習支援に関する資料・設備・サービスなど
現在、大学図書館において提供されている学習支援に関する資料、施設・設備、サービスのほか、学生アシスタントの活用、他部署との連携について尋ねた。
(2) ラーニング・コモンズの設置状況
ラーニング・コモンズ設置の有無、既設置の場合は設置の理由、呼称、提供されている要素について尋ねた。
(3) ラーニング・コモンズの必要要件
ラーニング・コモンズに関する要素を提示し、それぞれの必要度について尋ねた。

なお、(2)のラーニング・コモンズで実際に提供されているサービスと(3)のラーニング・コモンズに必要と考える要素については、下記のとおりであり、共通した 12 項目を提示して尋ねた。

① 目的やミッションの明示
② 学習支援に関するサービスのワンストップ提供
③ 学生に焦点をあてたサービスの提供
④ 学生のニーズの把握（アンケート調査やインタビュー調査の実施）
⑤ 利用調査の実施
⑥ ヘルプ・デスクの設置
⑦ 学生スタッフの配置
⑧ 飲食が可能
⑨ 談話が可能
⑩ 学内の他部署との連携
⑪ 授業との連携
⑫ 教員に対する教材作成支援サービスの提供

調査対象としては中国全土から無作為抽出することなども考えられたが、諸々の理由から、中国の大陸地区において大学図書館の「新しい学習支援空間」を先導している上海市

にの高等教育機関に焦点をあて、「普通本科院校」31 校中 20 校、「独立学院」4 校中 1 校、計 21 校を調査対象とすることとなった。また、この 21 校のうち、復旦大学上海視覚芸術学院、復旦大学、上海師範大学の 3 校については訪問調査もあわせて行われた。

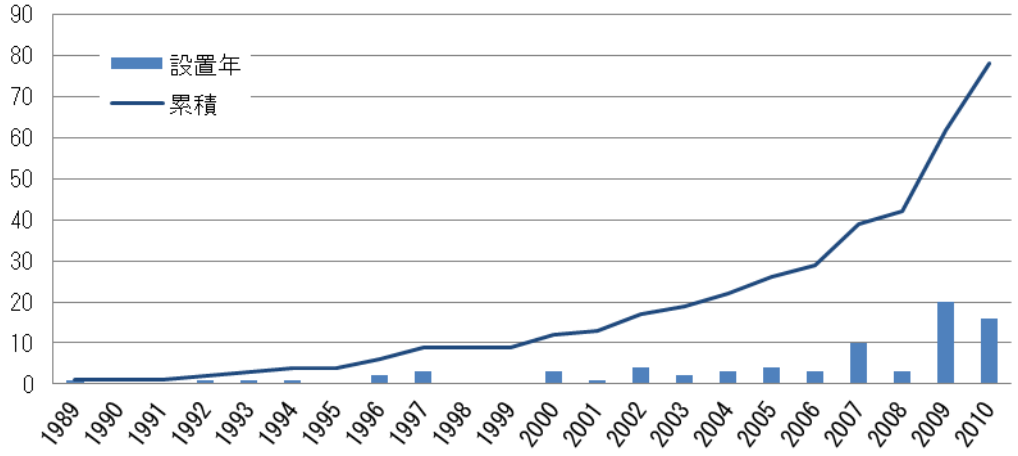
5.3 調査結果から見る上海の大学図書館におけるラーニング・コモンズ

ラーニング・コモンズに関する部分に着目し、今回の調査から見えるものをまとめる。2010 年に行った日本の調査とは規模も時期も違うので単純に比較することはできないが、参考にする。

(1) ラーニング・コモンズ設置の有無と設置のきっかけ

上海の調査において、ラーニング・コモンズを設置していると回答したのは 57.1%であった。また、ラーニング・コモンズの概念がよくわからないと回答した館も 1 校あった。ちなみに、日本の四年制大学および大学院大学の図書館を対象とした調査では、回答館のうち 15.5%がラーニング・コモンズを設置しているという結果であった。

ラーニング・コモンズ設置のきっかけとしては、「図書館からの提案」が突出して多く、91.7%となっているのが特徴的である。これに次ぐのが「図書館の新築・改築」の 58.3%である。日本の四年制大学および大学院大学の図書館を対象とする調査結果においても 52.5%が「図書館の新築・改修工事」がラーニング・コモンズ設置のきっかけとなったという結果となっている。ハード面での変化が、学習支援空間に影響を与えていることがわかる。



図表 14　日本の大学図書館におけるラーニング・コモンズの設置年（N=80）

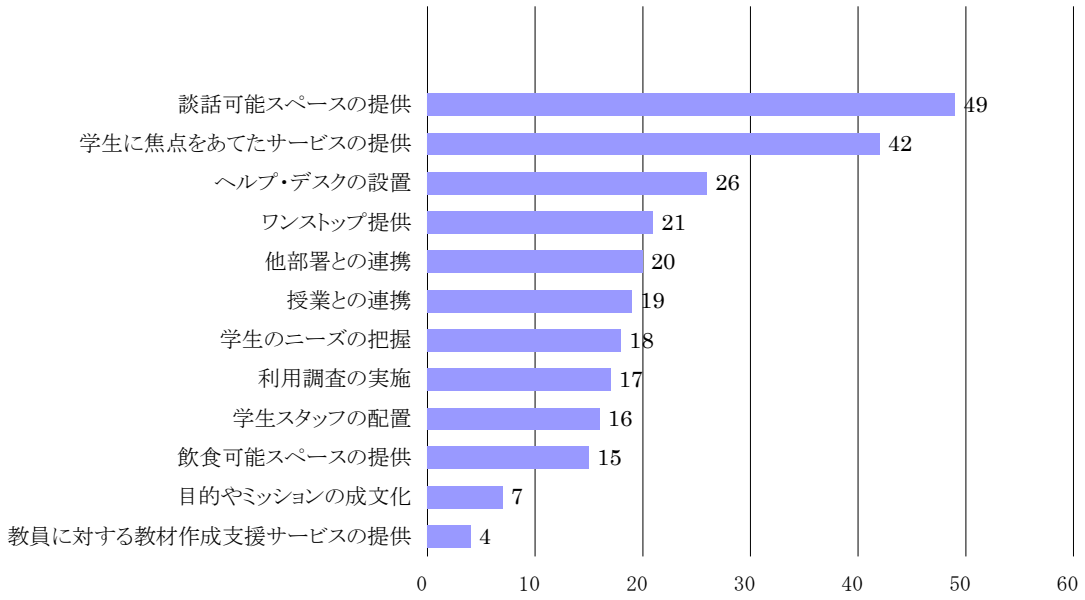
なお、上海においてラーニング・コモンズの理念が実践された初めてのケースは復旦大学上海視覚芸術学院の「情報ラーニング・コモンズ」であり、2006 年のことであった。日本の四年制大学および大学院大学の図書館を対象とした調査では 1989 年に設置したと回答した館もあったが、2000 年頃よりコンスタントに増加し始め、2000 年代半ば以降に普及し出したという結果が得られた。図表 14 は日本の四年制大学および大学院大学の図書館におけるラーニング・コモンズの設置年に関するグラフである。棒グラフはそれぞれの年に設置されたラーニング・コモンズ数を表し、線グラフはラーニング・コモンズ設置数の累積を表している。

(2) ラーニング・コモンズのサービス内容

ラーニング・コモンズのサービス内容については、「学生に焦点をあてたサービスの提供」、「ラーニング・コモンズの目的やミッションの明示」、「学習支援に関するサービスのワンストップ提供」がいずれも 83.3%で上位を占めている。一方、「飲食が可能」が 8.3%と最も低く、「学生スタッフの配置」が 25.0%とこれに次いで低い。

参考までに、日本の調査結果を図表 15 に示す。「談話が可能」が 64.5%と最も多く、「学生に焦点をあてたサービスの提供」(55.3%)、「ヘルプ・デスクの設置」(34.2%)と続く。最も低かったのは「教員に対する教材作成支援サービスの提供」の 5.3%であり、「目的・ミッションの成文化」が 9.2%とこれに次いで低い。

「学生に焦点をあてたサービスの提供」が高く、「飲食が可能」が低いことが共通している。



図表 15　日本の大学図書館におけるラーニング・コモンズを構成する要素（N=76）

(3) ラーニング・コモンズに必要とされる要素

ラーニング・コモンズに必要とされる要素として最も多かったのが「目的やミッションの明示」で 95.2%、次いで「学生のニーズの把握」が 95.2%、「学習支援に関するサービスのワンストップ提供」が 90.5%、「学生に焦点をあてたサービスの提供」が 85.7%と続く。

一方、必要としないとされる要素としてあげられたのが「飲食が可能」であり、38,1%の回答館が必要でないと答えた。また、次いで「談話が可能」も 14.3%が必要ないと回答されており、その他、「教員に対する教材作成支援サービスの提供」、「ヘルプ・デスクの設置」、「学生に焦点をあてたサービスの提供」、「目的やミッションの明示」について 4.8%が必要でないと回答している。なお、「談話が可能」については、71,4%があってもよいと回答している。

また、「教員に対する教材作成支援サービスの提供」、「授業との連携」、「学内の他部署との連携」、「飲食が可能」、「学生スタッフの配置」については半数近くが「あってもよい」と回答している。

この設問はいわば、ラーニング・コモンズの「理想」を尋ねたものであり、(2)のラーニング・コモンズのサービス内容は、ラーニング・コモンズの「実際」を尋ねたものであるということができる。これらを比較すると図表 16 のようになる。「理想」の欄は、ラーニング・コモンズの要素として必要であると回答された割合、「実際」の欄は、実際にラーニング・コモンズで提供されている要素（サービス）の割合を示す。

図表 16　ラーニング・コモンズに関する要素の理想と実際

	項目	理想	実際
①	目的やミッションの明示	95.2	83.3
②	学習支援に関するサービスのワンストップ提供	90.5	83.3
③	学生に焦点をあてたサービスの提供	85.7	83.3
④	学生のニーズの把握	95.2	66.7
⑤	利用調査の実施	81.0	41.7
⑥	ヘルプ・デスクの設置	76.2	41.7
⑦	学生スタッフの配置	57.1	25.0
⑧	飲食が可能	14.3	8.3
⑨	談話が可能	14.3	50.0
⑩	学内の他部署との連携	52.4	33.3
⑪	授業との連携	57.1	66.7
⑫	教員に対する教材作成支援サービスの提供	52.4	33.3

「理想」と「現実」のあいだで比較的大きなギャップがみられた項目としては、下記

の 4 項目をあげることができる。いずれも、「理想」では高く必要であるとされながらも「実際」が追い付いていないという結果となった。

- 学生のニーズの把握
- 利用調査の実施
- ヘルプ・デスクの設置
- 学生スタッフの配置

「談話が可能」については必要であると回答した館が 15%程度にとどまっているが、「あってもいい」と回答している館が 7 割以上みられるところから、積極的ではないものの緩やかに支持されているものと考えることができる。

また、「飲食が可能」という項目については「理想」も「現実」もともに際立って低いことが特徴的である。

5.4 上海の大学図書館におけるラーニング・コモンズ

最後に、今回調査対象とした上海の大学図書館におけるラーニング・コモンズの特徴について調査結果からわかったことをまとめる。

(1) ラーニング・コモンズ設置率

今回調査対象とした 21 館のうち、約 6 割にあたる 12 館にラーニング・コモンズが設置されている。一方で、大陸地区において最もラーニング・コモンズが進んでいると考えられる上海においても、ラーニング・コモンズの概念についてよくわからないと回答した館が 1 館あった。

(2) ラーニング・コモンズ設置時期

上海においてラーニング・コモンズが導入された初めてのケースは 2006 年の復旦大学上海視覚芸術学院である。よって、上海の大学図書館におけるラーニング・コモンズは、2000 年代半ばから急速に普及していることがわかる。

(3) ラーニング・コモンズ設置の理由

ラーニング・コモンズを設置した理由として最も多かったのは「図書館からの提案」であり、9 割以上であった。一方、「大学の方針」を理由としたのは約 3 割であった。このことから、上海の大学図書館におけるラーニング・コモンズは図書館主導で推進されていることがわかる。

また、「図書館の新築・改築」も 6 割近くをしめており、ハード面の変化が及ぼす影響もある程度あることがわかる。

(4) ラーニング・コモンズで提供されているサービス

ラーニング・コモンズで提供されているサービス（項目）で多かったのは、「学生に焦点をあてたサービスの提供」、「ラーニング・コモンズの目的やミッションの明示」、「学習支援に関するサービスのワンストップ提供」であり、いずれも 8 割以上のラーニング・コモンズで提供されていた。このことから、ラーニング・コモンズ設置の目的が明確であり、学生を対象に学習支援に関してワンストップのサービスが提供されていることがわかる。

一方で、「飲食が可能」としている館は 1 割以下と低く、「教員に対する教材作成支援サービスの提供」、「学内の他部署との連携」、「学生スタッフの配置」についても 3 割前後と少なかった。「学内の他部署との連携」、「学生スタッフの配置」を実施している館が 3 割にとどまっているところから、ラーニング・コモンズ運営にあたってはその多くが図書館スタッフによって担われていることが推察できる。

(5) ラーニング・コモンズに必要と考えられている要素

ラーニング・コモンズに必要であると考えられている要素については、「学生のニーズの把握」、「目的やミッションの明示」、「学習支援に関するサービスのワンストップ提供」が必要であると回答した館が多く、いずれの要素も 9 割以上であった。「学生に焦点をあてたサービス」も 9 割近くが必要であると回答している。「学生のニーズの把握」、「学習支援に関するサービスのワンストップ提供」、「学生に焦点をあてたサービス」がほとんどの館が必要であると回答しているところから、学生志向のラーニング・コモンズが目指されていることがわかる。

また、「目的やミッションの明示」、「学習支援に関するサービスのワンストップ提供」、「学生に焦点をあてたサービス」については実際に 8 割以上の館が既にサービスを提供している。これに対し、「学生のニーズの把握」については 7 割弱の館が実施していると回答しているに過ぎず、理想と現実に若干のギャップがみられる。この点については課題として挙げることができるだろう。

(6) ラーニング・コモンズに必要でないと考えられている要素

最も多くラーニング・コモンズに必要でないと回答された要素は、「飲食が可能」であり、4 割近くの館が必要でないと回答している。次に多かった「談話が可能」が、約 15%の館が必要ないと回答しているのと比較すると、「飲食が可能」は圧倒的に必要でないと考えられているということができる。なお、「談話が可能」については約 7 割があってもよいと回答している。

(7) ラーニング・コモンズに関する今後の課題

「ラーニング・コモンズに必要であると考えられている要素」すなわち「理想」と「ラ

ーニング・コモンズで実際に提供されているサービス」すなわち「現実」の間に、比較的大きなギャップがみられた項目は、「学生のニーズの把握」、「利用調査の実施」、「ヘルプ・デスクの設置」、「学生スタッフの配置」の 4 項目であった。これらはすべて、上海のラーニング・コモンズにおける今後の課題と考えることができるが、特に「学生スタッフの配置」については実際に実施している館が 25%にとどまっているところから、今後の大きな課題であるといえるだろう。

「学生スタッフの配置」は、ラーニング・コモンズにおける人的資源を量的・質的に補うだけではなく、利用者との協働やピア・ラーニングの観点から、大変重要な要素である。ラーニング・コモンズを効果的に運営する上で不可欠な要素であることから、今後の充実がのぞまれる。

おわりに

2011 年の 3 月 12 日から 16 日まで上海を訪問した。今回は筑波大学の呑海沙織も参加して上海図書館で講演会をしたり、京都大学で研究生として図書館情報学を学びたいという学生と面接をしたり、11 月に開催される日本図書館研究会と上海市図書館学会との第 8 回国際図書館セミナー（京都で開催）のテーマや人選を決めたり、さらに昨年から手がけていた共同研究の報告書『中国公共図書館の評価システムと現状』の最終的な検討会を 1 日かけて実施した。この評価システムに関する研究は 2010 年の 5 月頃から、上海図書館上海科学技術情報研究所・情報諮問研究センターの劉暁丹、徐宏宇と行ってきたもので、2011 年 5 月に発行できた（川崎良孝・徐瑛・劉暁丹・徐宏宇『中国公共図書館の評価システムと現状』*KSP* シリーズ 12, 京都図書館情報学研究会発行, 2011 年 5 月, 88p）。

実はこの「公共図書館の基準」は最新のもので、その続編として「大学図書館の基準」を手がけようと、上記の検討会で合意したのだが、のちになって大学図書館の基準は少し古くて参考にならないことが判明した。そこで呑海と相談して、中国の大学図書館を対象に、英米や日本では大学図書館の共通言語になり、一定の実践もある「ラーニング・コモンズ」について調べてみようということになった。その場合、まず調査対象をどのようにするのかという現実的な問題があった。そこで、調査担当チーム（劉暁丹・徐宏宇）に、(1) 中国の大学の数、(2) 江蘇省の大学の一覧、(3) 上海の大学の一覧といった基礎データの作成を求め、さらに (4) 中国の大学は序列が付けられているのだがその 100 位まで、最後に (5) 中国の大学はどのように区分されているのかについて情報提供を求めた。2011 年 8 月 18 日のことである。

完璧なデータが送られてきたのが 10 日後の 8 月 28 日のことであり、例えば、中国での大学図書館の数については、以下のようであった。

> 根据 2011 年具有高等学历教育招生资格的高等学校名单（截至 2011 年 4 月），普通本科院校（820 所），高职院校（1,228 所），独立学院（311 所），分校办学点（70 所）。

おおまかに日本の教育機関にあてはめると、「高职院校」は日本の専門学校、「独立学院」は日本の私立大学に相当する。なお「分校办学点」とは、大学に付属し、社会人向けの専門学校レベルの学校で、教育資格は年間審査制が用いられるということであった。

例えば上海の大学のとして送られてきた一覧が以下で、〇印は本調査の対象館である。

２．上海的大学的名录

普通本科院校（31）	高职院校（31）	独立学院（4）
复旦大学〇	上海医疗器械高等专科学校	上海外国语大学贤达经济人文学院
上海交通大学〇	上海出版印刷高等专科学校	上海师范大学天华学院
同济大学〇	上海医药高等专科学校	复旦大学上海视觉艺术学院〇
华东理工大学〇	上海旅游高等专科学校	同济大学同科学院
东华大学〇	上海公安高等专科学校	
华东师范大学〇	上海电影艺术职业学院	
上海外国语大学〇	上海东海职业技术学院	
上海财经大学〇	上海新侨职业技术学院	
上海海关学院	上海城市管理职业技术学院	
上海大学〇	上海思博职业技术学院	
上海理工大学〇	上海中侨职业技术学院	
上海海事大学〇	上海托普信息技术职业学院	
上海工程技术大学〇	上海科学技术职业学院	
上海海洋大学〇	上海邦德职业技术学院	
上海中医药大学〇	上海立达职业技术学院	
上海师范大学〇	上海建峰职业技术学院	
华东政法大学〇	上海工艺美术职业学院	
上海政法学院	上海农林职业技术学院	
上海建桥学院	上海体育职业学院	
上海第二工业大学	上海震旦职业学院	
上海应用技术学院	上海海事职业技术学院	
上海电力学院	上海民远职业技术学院	
上海电机学院〇	上海中华职业技术学院	
上海对外贸易学院〇	上海工会管理职业学院	
上海金融学院	上海工商外国语职业学院	
上海立信会计学院	上海交通职业技术学院	
上海体育学院	上海济光职业技术学院	
上海音乐学院	上海行健职业学院	
上海戏剧学院〇	上海电子信息职业技术学院	
上海商学院〇	上海欧华职业技术学院	
上海杉达学院	上海健康职业技术学院	

なお、中国の大学序列を示しておくと、100 位以内に入っているのは、复旦大学（第 4 位）、上海交通大学（第 6 位）、華東師範大学（第 23 位）、同济大学（第 24 位）、華東理工大学（第 36 位）、上海大学（第 64 位）、東華大学（第 69 位）、上海財経大学（第 77 位）であった。

次に中国の大学の区分の仕方であるが、これについては以下の表が送られてきた。表が示すように基本的に 5 つの区分が用いられているようである。

高考志愿全国大学共分 5 类：

综合性大学	以北京大学、复旦大学、南京大学、浙江大学、武汉大学、中山大学、吉林大学、南开大学、山东大学、四川大学、兰州大学、厦门大学等为代表	这些大学历史悠久、理工文医学科门类齐全、文理渗透，文化底蕴较为深厚。
工科为主的综合性大学	以清华大学、上海交通大学、西安交通大学、同济大学等为代表。	这些大学工科专业实力很强，但理科基础和人文社会科学相对稍弱。
准综合大学	如北京科技大学、北京邮电大学、中国农业大学、北京林业大学、中国地质大学、中央财经大学、中国政法大学、北京外国语大学等。	这类大学以为各类工业、农林牧水产业、地矿、财经、政法、语言等行业培养专业人才为目的，主体专业实力很强，行业特点明显，与行业有天然联系，又都在逐渐向综合性大学发展。
师范类院校	以北京师范大学、华东师范大学、东北师范大学、华中师范大学、华南师范大学和陕西师范大学为代表。	属综合类大学，其教学水平、科研实力往往超过同批次的准综合大学。这类院校都陆续开设了非师范专业。
专业院校	如医学、艺术、体育、军事、警察等。	这类院校专业性很强，培养目标明确。

こうしたデータとともに、調査担当チームは中国の大学図書館とラーニング・コモンズについて事前調査（文献調査を含む）を行ったのだが、その結果、上海を中心とする華東地域がラーニング・コモンズの先進地域であることがわかってきた。また中国の場合は日本と違って、アンケート用紙を配布して、それだけでアンケート結果が返送されてくるということでもなく、メールで一斉にアンケート用紙を配布するという方式も難しいということであった。「難しい」というのは何ら技術的なことではない。そうしたことで上海地域の大学に調査対象を絞り、各類型の大学を入れるとともに、ラーニング・コモンズに力を入れている大学は欠かさず含め、調査対象数としては 20 館を目安にすることにした。

一方、アンケート項目については、呑海が日本で「学習支援空間に関するアンケート調査票」を作成して、すでに調査を実施しているので、それを調査担当チームに送り、中国の実情に合わせて、項目を取捨選択、さらに修正、追加することにした。なお、日本の四

年制大学および大学院大学の図書館を対象とした調査の結果については、下記で発表される予定である。

呑海沙織・溝上智恵子．日本の大学図書館における学習支援の現状．大学図書館問題研究会論文誌，35，2012.8

そのような経過を経て、調査チームは 2011 年 10 月から 2012 年 1 月にかけて、各図書館を個別に調査を実施し、3 つの図書館については特に詳しい実地調査を行った。第 1 回目の報告書が送られてきたのは 2012 年 1 月 21 日であった。しかし重要な 1 つの図書館からのアンケートの回答が遅れており、数値をすべて修正する必要があるとのことであった。日程の関係もあり、日本語訳を行うことにし、上海の調査チームには最終報告書では数値などが変わったところは明示するように求めた。そして初版の日本語訳を李霞（京都大学大学院教育学研究科博士課程）にお願いした。彼女はかなり翻訳に苦労したようである。報告書の中国語自体によくわからないところがあると笑っていた。

そののち 2 月の中旬になって、最終版が送られてきたのだが、この時期は大学が最も忙しいときで、4 月上旬になって最終的な日本語版を完成することができた。なお当初の計画では、上海を訪問したときに、2 つ 3 つの大学図書館を訪問して、ラーニング・コモンズや学習支援活動について直接話しを伺うことになっていた。しかし筆者の日程の都合で、2012 年 9 月中旬までスケジュールの調整がつかないということで、その部分を本報告書に組み込めなかったのは残念である。

こうした経過を経て完成したのが本報告書である。大学図書館を考える場合の参考になることを願っている。

川崎良孝

2012 年 7 月 31 日

京都図書館情報学研究会と刊行物

京都図書館情報学研究会は 1999 年に発足した研究会（当初は京都大学図書館情報学研究会、2010 年から現名）で、さまざまな人からの援助を得つつ、良質の図書館情報学の図書、とりわけ学術的著作の刊行を目指しています。日本図書館協会の販売協力によって、以下の図書を刊行できました。今後も工夫しつつ、年に数点の刊行を目指しています。

・川崎良孝編著（長尾真監修）『大学生と『情報の活用』：情報探索入門;京都大学全学共通科目講義録』（1999 年 3 月）絶版
・川崎良孝解説・訳『ボストン市立図書館は、いかにして生まれたか：原典で読む公立図書館成立期の思想と実践』（1999 年 10 月）
・川崎良孝・高鍬裕樹著『図書館・インターネット・知的自由: アメリカ公立図書館の思想と実践』（2000 年 4 月）絶版
・ウェイン・A.ウィーガンド編著『『図書館の権利宣言』を論じる』（川崎良孝・藥師院はるみ訳, 2000 年 9 月）
・バーバラ・M.ジョーンズ著『図書館・アクセス・知的自由: 公立図書館と大学図書館の方針作成』（川崎良孝・村上加代子訳, 2000 年 11 月）絶版
・河井弘志著『ドイツ図書館学の遺産: 古典の世界』（2001 年 4 月）絶版
・川崎良孝編著（長尾真監修）『大学生と『情報の活用』：情報探索入門;京都大学全学共通科目講義録（増補版）』（2001 年 4 月）絶版
・呉建中・塩見昇・川崎良孝著　菅待子訳　川崎良孝編『21 世紀の図書館を考える: 中国・日本・アメリカ』（2001 年 10 月）絶版
・川崎良孝編著『図書館・図書館研究を考える: 知的自由・歴史・アメリカ』（2001 年 12 月）絶版
・スザンヌ・ヒルデンブランド著『アメリカ図書館史に女性を書きこむ』（田口瑛子訳, 2002 年 6 月）絶版
・川崎良孝解説・訳『公教育と図書館の結びつき: ホーレス・マンと学校区図書館』（2002 年 7 月）絶版
・ヘンリー・ライヒマン著『学校図書館の検閲と選択: アメリカにおける事例と解決方法（第 3 版）（川崎佳代子・川崎良孝訳, 2002 年 9 月）

・川崎良孝著『図書館裁判を考える: アメリカ公立図書館の基本的性格』(2002 年 11 月)
・イーヴリン・ゲラー著『アメリカ公立図書館で禁じられた図書: 1876－1939 年、文化変容の研究』(川崎良孝・吉田右子訳, 2003 年 10 月)
・トニ・セイメック著『図書館の目的をめぐる路線論争－アメリカ図書館界における知的自由と社会的責任: 1967－1974 年』(川崎良孝・坂上未希訳, 2003 年 10 月)
・ジョアン・E.パセット著『アメリカ西部の女性図書館員：文化の十字軍、1900－1917 年』(宮崎真紀子・田口瑛子訳, 2004 年 3 月)
・川崎良孝編著　吉田右子・高鍬裕樹・金智鉉・繆国琴・郭過渡・沈麗雲著『技量の継続的向上を求めて：図書館員の研修に関する国際動向』(*KSP* シリーズ 1, 2004 年 5 月)
・河井弘志編訳『司書の教養』(*KSP* シリーズ 2, 2004 年 8 月) 絶版
・ウェイン・A.ウィーガンド著『手に負えない改革者：メルヴィル・デューイの生涯』(川崎良孝・村上加代子訳, 2004 年 9 月)
・マイケル・F.ウィンター著『技量の統制と文化：司書職の社会学的理解に向けて』(川崎良孝訳, 2005 年 1 月)
・メアリー・リー・バンディ、フレデリック・J.スティロー編著『アメリカ図書館界と積極的活動主義 :1962－1973 年』(川崎良孝・森田千幸・村上加代子訳, 2005 年 7 月)
・アビゲイル・A.ヴァンスリック著『すべての人に無料の図書館：カーネーギー図書館とアメリカ文化　1890－1920 年』(川崎良孝・吉田右子・佐橋恭子訳, 2005 年 9 月) 絶版
・高鍬裕樹著『デジタル情報資源の検索』(*KSP* シリーズ 3, 2005 年 9 月) 絶版
・エリザベス・ロング著『ブッククラブ：アメリカ女性と読書』(田口瑛子訳, 2006 年 3 月)
・川崎良孝著『アメリカ公立図書館・人種隔離・アメリカ図書館協会：理念と現実との確執』(2006 年 3 月)
・バーバラ・T.メイツ著『高齢者への図書館サービスガイド：55 歳以上図書館利用者へのプログラム作成とサービス』(*KSP* シリーズ 4, 高島涼子・川崎良孝・金智鉉訳, 2006 年 11 月) 絶版
・王漢棟・王萍・魏家雨編著『新しい調査研究サービス: 上海図書館・科学技術研究所の経験』(*KSP* シリーズ 5, 櫻井待子・徐瑛・川崎良孝訳, 2006 年 10 月)
・塩見昇・川崎良孝編著『知る自由の保障と図書館』(2006 年 12 月) 絶版
・高鍬裕樹著『デジタル情報資源の検索 (増訂版)』(*KSP* シリーズ 6, 2007 年 3 月) 絶版
・ウェイン・A.ウィーガンド著『司書職の出現と政治：アメリカ図書館協会　1876－1917 年』(川崎良孝・吉田右子・村上加代子訳, 2007 年 3 月)
・呉建中著『21 世紀の図書館：世界のなかの中国の図書館』(川崎良孝・櫻井待子・村上

加代子訳, 2007 年 7 月）

・ダグラス・レイバー著『司書職と正当性：公立図書館調査（Public Library Inquiry のイデオロギー』（川崎良孝訳, 2007 年 9 月）

・ジョン・E.ブッシュマン著『民主的な公共圏としての図書館：新公共哲学の時代に司書職を位置づけ持続させる』（川崎良孝訳, 2007 年 11 月）

・キャスリーン・デ・ラ・ペーニャ・マックック著『アメリカ公立図書館職入門』（田口瑛子・川崎良孝・村上加代子訳, 2008 年 3 月）

・ジョン・E.ブッシュマン、グロリア・J.レッキー編著『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』（川崎良孝・久野和子・村上加代子訳, 2008 年 9 月）絶版

・河井弘志著『ドイツの公共図書館思想史』（2008 年 10 月）

・アレクサンドラ・ヤロウ, バーバラ・クラブ, ジェニファーーリン・ドレイパー著『公立図書館・文書館・博物館：協同と協力の動向（IFLA 専門報告第 108 号）』（*KSP* シリーズ 7, 垣口弥生子・川崎良孝訳, 2008 年 12 月）注：本報告書は非売品です。ご希望の方は切手 400 円分を添えて、事務局にお申し込みください。

・高鍬裕樹著『デジタル情報資源の検索（増訂第 2 版）』（*KSP* シリーズ 8, 2009 年 3 月）絶版

・金暁明・章騫・沈麗云・川崎良孝著『上海図書館とアウトリーチ・サービス』（*KSP* シリーズ 9, 2009 年 4 月）絶版

・呉建中・邱五芳・金暁明・範并思・沈麗云著『中国の図書館と図書館学：歴史と現在』（沈麗云・櫻井待子・川崎良孝訳, 2009 年 7 月）

・エド・デーンジェロ著『公立図書館の玄関に怪獣がいる：ポストモダンの消費資本主義は、どのようにして民主主義、市民教育、公益を脅かしているのか』（川崎良孝・久野和子・藤野寛之訳, 2009 年 10 月）絶版

・キャサリン・シェルドリック・ロス、リン（E.F.）マッケクニー、ポーレット・M.ロスバウアー著『読書と読者：読書、図書館、コミュニティについての研究成果』（川崎佳代子・川崎良孝訳, 2009 年 12 月）絶版

・ジョージ・ボビンスキー著『図書館と図書館職：挑戦と変革の 60 年, 1945－2005 年』（田口瑛子・川崎良孝訳, 2010 年 3 月）

・バーバラ・ジョーンズ著『大学図書館で知的自由を擁護する :現場からのシナリオ』（川崎良孝・前川敦子・桑原千幸訳, 2010 年 5 月）

・川崎良孝編著『揚子江デルタ地域の公立図書館：調査報告書（2009 年 10 月－2010 年 1 月）』（*KSP* シリーズ 10, 2010 年 5 月）注：本報告書は非売品です。ご希望の方は切手 600 円分を添えて、事務局にお申し込みください。

・パット・R.スケールズ『学校図書館で知的自由を擁護する：現場からのシナリオ』（川崎良孝・久野和子・福井佑介、谷口智恵訳, 2010 年 7 月）

・川崎良孝・高鍬裕樹著『図書館利用者と知的自由：管轄領域、方針、事件、歴史』（2011

年 1 月）絶版

・高鍬裕樹著『デジタル情報資源の検索（増訂第 3 版）』（*KSP* シリーズ 11, 2011 年 2 月）

・川崎良孝・徐瑛 著訳『中国公共図書館の評価システムと現状』（*KSP* シリーズ 12, 2011 年 5 月）注：本報告書は非売品です。ご希望の方は切手 400 円分を添えて、事務局にお申し込みください。

・川崎良孝・吉田右子著『新たな図書館・図書館史研究：批判的図書館史研究を中心として』（2011 年 9 月）

・川崎良孝・安里のり子・高鍬裕樹著『図書館員と知的自由：管轄領域、方針、事件、歴史』（2011 年 10 月）

・ジーン・L.プリアー著『図書館倫理：サービス・アクセス・関心の対立・秘密性』（川崎良孝・久野和子・桑原千幸・福井佑介訳, 2011 年 11 月）

・ゾイア・ホーン著『ゾイア！:ゾイア・ホーン回顧録　人びとの知る権利を求めて闘う』（田口瑛子訳, 2012 年 3 月）

・ジェイソン・グリフィー, サラ・ヒュートンージャン, イーライ・ニーバーガー著『21 世紀の図書館におけるプライヴァシーと情報の自由』（*KSP* シリーズ 13, 高鍬裕樹・久野和子・川崎智子・川崎良孝訳, 2012 年 4 月）

・川崎良孝・高鍬裕樹・川崎智子『秘密性とプライヴァシー :アメリカ図書館協会の方針』（*KSP* シリーズ 14, 2012 年 5 月）

・川崎良孝 解説・訳, 久野和子・川崎智子 訳『ボストン市立図書館と J.ウィンザーの時代（1868-1877 年）：原典で読むボストン市立図書館発展期の思想と実践』（2012 年 5 月）

今回の『中国大学図書館の学習支援に関する調査報告』は以下のチームがサポートしました。

総　　括：矢野麻里美（京都大学大学院教育学研究科図書館情報学研究室助手）

編集校正：矢野麻里美

　　川崎良孝

表紙デザイン：徐瑛

章題デザイン：坂上未希（箕面市立図書館）

ロゴ作成：服部芳明

研究会代表　川崎　良孝

著者紹介

川崎　良孝

1998 年　京都大学大学院教育学研究科教授

主要業績 :『新たな図書館・図書館史研究』（京都図書館情報学研究会発行，日本図書館協会発売，2012）;『図書館利用者と知的自由：管轄領域、方針、事件、歴史』（京都図書館情報学研究会発行，日本図書館協会発売, 2011）;『図書館の原則（改訂 3 版）図書館における知的自由マニュアル（第 8 版）』（翻訳，日本図書館協会， 2010）ほか

呑海　沙織

2011 年　筑波大学図書館情報メディア系准教授

主要業績 :『図書・図書館史（現代図書館情報学シリーズ)』（共著，樹村房，2012）;「学術情報流通と大学図書館 : 学術情報基盤，電子ジャーナル，オープンアクセス」『図書館・図書館学の発展』（日本図書館研究会，2010）;『図書及び図書館史（JLA 図書館情報学テキストシリーズ)』（共著，日本図書館協会，2010）ほか

李　霞

2007 年　京都大学大学院教育学研究科博士課程

主要業績 :「文革後中国における育成すべき人間像と育成方法の変遷に関する検討」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第 58 号, 2012 ;「中国における児童の「主体性」育成に関する理論と実践の展開」『日本教育目標・評価学会紀要』第 21 号, 2011 ほか

劉暁生・徐宏宇

上海図書館上海科学技術情報研究所・情報諮問研究センター

『中国大学図書館の学習支援に関する調査報告』

2012 年 7 月 31 日　　非売品

著　者　川崎良孝・呑海沙織・李霞・劉暁丹・徐宏宇

発　行　京都図書館情報学研究会

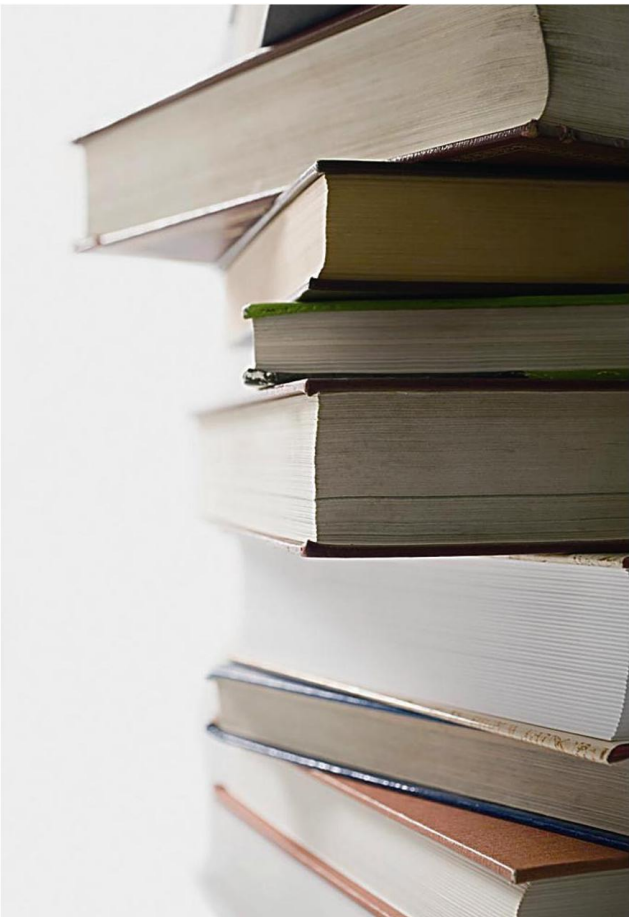
〒606-8501　京都市左京区吉田本町

京都大学大学院教育学研究科図書館情報学研究室内

電話 075-753-3077

表紙デザイン　徐瑛

川崎良孝・呑海沙織・李霞・劉暁丹・徐宏宇　著



発行　京都図書館情報学研究会

KSP シリーズ 15